

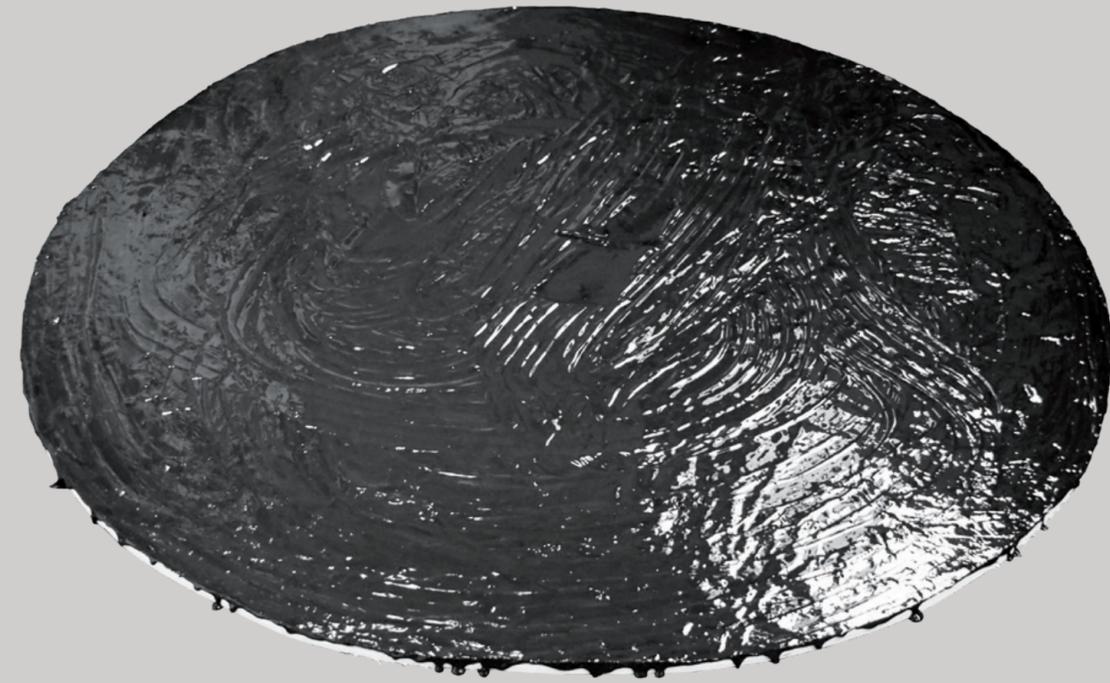


展覧会

about me

～“わたし”を知って～

全身全霊 Body and Soul / BiG-i Arts Seminar



日時：2021年12月16日(木)、18日(土)～20日(月)11:00～19:00 ※最終日は15:00まで
 会場：Imagine&Design(大阪市中央区南船場2-6-12)

出展事業所／作家
 社会福祉法人富翔会 わくわく富田林(大阪府富田林市)／児玉 紗世、多田 雅哉、南 英登
 社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房(滋賀県甲賀市)／上土橋 勇樹、中井 寛虹、吉田 楓馬
 アトリエ ペンライズ(大阪府大阪市)／平井 光真

主催：大阪府 実施主体：国際障害者交流センター ビッグ・アイ
 この事業は、大阪府の委託事業として国際障害者交流センター ビッグ・アイが実施します。
 (令和3年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業)

ビッグ・アイ アーツセミナー 展覧会about me 5

ギャラリーツアー&トークセッション

日時：2021年12月17日(金) 13:30～17:00

1 ギャラリーツアー

障がいのある人が表現した「モノ」や作品を通して、作品の背景、表現することの普遍性や多様性をあらわした先駆的なアート展覧会を、ボディ&ソウルなメンバーとともに巡ります。

案内人 実行委員会メンバー：

※敬称略

大澤辰男 松田豊美 大西雅子

中原立枝 田中弥生 廣海充南子 桐葉朋子

2 トークセッション

障がいのある人のアート、表現活動について作者を取り巻く環境や支援、変わったこと、変わらないこと、続けていることなど、about meの5年間の振り返りも含めてトークします。

登壇者

※敬称略



川井田 祥子

鳥取大学地域学部 教授
鳥取大学附属特別支援学校校長



木下 真

福祉ジャーナリスト



神里 予知恵

民族音楽・民俗芸能研究者



中津川 浩章

美術家、アートディレクター



新川 修平

特定非営利活動法人100年福祉会
片山工房 理事長



鈴木 京子

国際障害者交流センター ビッグ・アイ
副館長・アーツ&ゼクティブプロデューサー

ビッグ・アイ アーツセミナーYouTubeライブ配信(無料)

日時：2021年12月17日(金) 13:30～17:00

当日、YouTubeでもライブ配信。その後、アーカイブとして動画配信する予定です。

YouTubeライブ
配信ページは
こちらから



かおともじを
描いてくださった
作家紹介

一般社団法人Abigail



■かお／早田 都和(一般社団法人Abigail コミック・カウンシル所属)
2002年大阪府生まれ、コミック・カウンシル所属。幼少期よりアートに触れ、当初はおもに既存キャラクターを描いていましたが、そのツールはボールペンと紙〜PCとマウス〜ニンテンドーDSとペン〜スマホと指〜と変化した数年前よりiPad+指に落ち着きました。えげつない指さばきでアプリを駆使し秒速で仕上げる作品は1日約200点に及ぶこともありますが、実は筆でもあっさり描いてしまうところが早田の器用なところなのです。
■もじ／上田 匡志、早田 都和、平野 喜靖(一般社団法人Abigail コミック・カウンシル所属)

令和3年2月コミック・カウンシルを旗揚げ。オモロいこと評議会という名のとおり、人が表現するすべての手段を受け入れて、いろいろな人がいろいろな形で毎日を楽しむことに専従しています。また、今秋より併設の本格派コーヒースタンドのABIGAILCOFFEEがオープン(現在毎週末の木・金曜日営業)となり、キッチンから接客までコミック・カウンシル所属メンバー主体で営業中。 <https://www.helloabigail.org/>

お問合せ 「ビッグ・アイ展覧会・セミナー」係 〒590-0115 大阪府堺市南区茶山台1-8-1 国際障害者交流センター ビッグ・アイ
TEL 072-290-0962 / FAX 072-290-0972 ※お電話でのお問合せは、土・日・祝を除く10:00～17:00
Eメール seminar@big-i.jp ウェブサイト <https://www.big-i.jp/>

表紙作品：多田 雅哉(社会福祉法人富翔会 わくわく富田林)

「about me 5 ～“わたし”を知って～」に寄せて

中津川 浩章(美術家、about me展覧会実行委員会キュレーター・メインファシリテーター)

2017年に始まった展覧会「about me～“わたし”を知って～」は5回目を迎えました。近年、障害がある人の表現活動に対する理解は深まり、クオリティの高い作品が多くの人々の目に触れるようになりました。表現活動の目に見える成果としての「作品」は、「美術」として評価され広く認知されています。一方で、障害がある人の表現活動における「作品」のクオリティ以外の意味と価値について、人々が知る機会は多くありません。

本展は、障害がある人たちの日常を生きる姿に目を向け、作品が生まれる「現場」に足を運び、表現に隠された秘密に迫ろうとするものです。作品はテキストや写真、映像などととも展示され、表現活動を軸としてその人の人生や福祉の在り方まで多角的な視点で浮かび上がらせたいと考えています。

人は表現することで何を得的のか。何のために、なぜ表現するのか。その人にとって表現がどのような意味を持つのか。生きることと表現することは、深くつながっています。

今回、私たちは滋賀県の「やまなみ工房」と大阪府の「わくわく富田林」、この2か所の福祉施設を実際に訪れて聞き取り調査を行いました。作品が生まれるプロセスや作品の背景にある物語などのほか、事業所の掲げる理念や利用者さんとの関わり方などについても、現場の支援員の方々の肉声を聞くことができました。さらに、個々の作家の表現については、障害特性、スタッフとの関係性、クオリティなどを多角的に評価してセレクトした結果、6名のアーティストに出展していただくことになりました。

「やまなみ工房」は、アート活動において日本でも屈指の規模とクオリティを誇る福祉作業所です。アメリカンフォークアートミュージアムやボンビドゥー・センターに収蔵されるなど、たくさん著名なアーティストを輩出し世界的にも注目を集めています。やまなみ工房から優れた作品が数多く生まれるのはどうしてなのか。その謎に迫るべくセレクトしたのは、「吉田楓馬」「中井寛虹」「上土橋勇樹」の3名です。すでにスタイルや評価が確立したアーティストではありません。入所したばかりで、知られてはいませんが、やまなみ工房が発するエネルギーをそのまま反映しているような、ポジティブなみずみずしい個性があります。

捨てられてごみ同然だったものを組み合わせで新しい生命を吹き込む「吉田楓馬」。不気味でありながらどこか親しみを覚える見たことのない生き物。尋常でない強烈な呪術的存在感を放ちます。クレパスのスピード感溢れる力強い塗り込みでトラヤツチモグラなどを描く「中井寛虹」。抽象的な造形性とイラストレーショナルな親しみやすさを兼ね備え、明快で強いインパクトがあります。カリグラフィのような美しい文字で独自の言語を描くのは「上土橋勇樹」。手書きの文字だけでなく、パソコンソフトを駆使した文字や画像のデザインは独特なノスタルジーを漂わせます。

「わくわく富田林」は、表現活動を始めて数年という短期間に、公募展で入選する作家を何人か輩出しています。重度の障害者を受け入れている施設であることや、重厚な建物の外観からもオーソドックスな福祉施設をイメージしますが、そんな王道を行くような施設が表現活動を始めた理由は?どんな支援をしているのだろうかと期待しつつ訪れました。そこで出会ったのが「多田雅哉」「南英登」「児玉紗世」の3名です。

粘度を高めるためボンドを混ぜた黒のペンキでひたすら支持体(絵画を描く際に必要な材料。キャンバスや板、画用紙など)となるベニヤ板を塗り込んでいく「多田雅哉」。他の人のための下地作りなのですが、この支持体自体が彼の作品です。リズムを刻みながら塗っていく黒々と盛り上がった画面がじつに魅力的です。京劇の隈取りメイク風のビーバーを描く「南英登」。日によってさまざまに変化するビーバーは何を物語っているのでしょうか。左右対称になるよう手でちぎったセロハンテープで作ったメガネには彼の母の姿が投影されています。四角や円盤のベニヤ板にトントンと音を打ち鳴らして描くのは「児玉紗世」。以前のイラストの絵日記から、より根源的な行為性の強い抽象絵画を描くようになり、表現を引き出す支援員との信頼関係をそこに見ることができま

about me

近代美術の文脈では、作品はあくまでも個人に帰すべきものとされています。それはある意味正しいのですが、障害がある人たちの場合は少し事情が違ってきます。制作自体は一個人の表現行為ですが、それを支える周りの環境があつてはじめて表現活動は成り立ちます。作品は施設での日々の支援と密接に関係し、障害特性、発達支援、支援員とのコミュニケーションなどさまざまな要素が絡み合つて、その延長に「表現」が立ち上がってくるのです。障害があるアーティストたちの作品の多くは、支援の延長として支援員との関係性の中から生まれてきます。良くも悪くもその関係性は作品に影響を与え、支援の仕方によっては作品のクオリティを変えてしまうこともあります。

障害のあるアーティストからどのようにして作品が生まれるのか、どんな生活を送り、支援者とどんな関係性を持っているのかは、作品だけ見てもほとんど見えてきません。一人ひとり生きている世界は異なり、「障害者」と一括りにしてしまうと見えなくなるものがあります。障害がある人が生きている世界のそれぞれ異なった背景を理解してこそ、彼らの表現の真のリアリティが見えてきます。アートは障害のある人のもうひとつの言語。コミュニケーションツールとしてのアートを介することで、これまで見えていなかったものが視覚化されます。多くの人は福祉事業所の日常的な支援=「介護」「大変」「地味」というイメージを持つかもしれませんが。けれど実際そこには目には見えない豊かなコミュニケーションがたしかに存在しています。

「about me 5 ～“わたし”を知って～全身全霊 Body and Soul」は、福祉や障害というスキームではなく、表現をめぐる普遍的な人間の物語を可視化しようとする試みです。about meの“me”とは、表現に全身全霊で体当たりする作家のことであり、そして支援員や“わたし”のことでもあるのです。

この展覧会には、福祉施設関係者、支援員、アーティスト、民俗芸能研究者、福祉ジャーナリスト、特別支援学校・教育関係者などが参加し、それぞれ異なる立場から多様なまなざしで「表現」に向き合い、対話を重ねています。そうした中で実感したことは、芸術・アートをめざしていないからこそ切実にあるいは無心に表現された作品は、芸術という制度を超えて人の心を打ち結果的に芸術となるということでした。

この展示会場「Imagine&Design」は、リラックスして家でくつろぐようにアートを体感できるスペースです。現代アートのギャラリーのようなホワイトキューブとは違って、大きな窓から日差しが差し込む開放的な空間の中で、ディープなアート作品を味わってほしいと思います。



中津川 浩章(なかつがわ・ひろあき)

美術家、アートディレクター。美術家としての制作活動と同時に、さまざまな分野で社会とアートの関係性を問い直す取り組みを行う。表現活動ワークショップ、バリアフリーアートスタジオ、美術史ワークショップ、講演などを通じて人間が表現することの意味、大切さを伝えている。アートスタジオディレクション、展覧会企画・プロデュース、キュレーションを数多く手がけ、川崎市岡本太郎美術館「岡本太郎とアール・ブリュット」展キュレーター、「ビッグ・アイ アートプロジェクト」展覧会アートディレクターなどを務める。

実行委員会メンバー：

中津川 浩章(美術家、アートディレクター)

大澤 辰男(美術作家、アトリエライブハウス・美術教室ライブハウス)

神野 知恵(民族音楽・民俗芸能研究者)

松田 豊美(画家、アトリエ ペンライズ)

大西 雅子(社会福祉法人ふたかみ福祉会 ハビバル)

中原 立枝、田中 弥生(社会福祉法人富翔会 わくわく富田林・まんてん)・廣海 充南子(講師)

桐葉 朋子(社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房)

鈴木 京子、上岡 亜希、中川 なつみ(国際障害者交流センター ビッグ・アイ)